



統計から社会の実情を読み取る

第85回 人は何歳ぐらいで死を迎えるのか

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。



誤解を招きやすい平均寿命

日本人の平均寿命は驚異的に伸び、2016年には男が80歳、女が87歳と主要先進国の中ではトップである。

平均寿命は分かりやすいようで、誤解を招きやすいデータである。

まず、一般に平均寿命と呼ばれるのは、寿命が伸びていくことが一般には想定されない動植物に適用される「生命表」の概念であり、毎年の年齢別死亡率から仮想計算された0歳時の平均余命（あと何年生きる可能性が高いか）のことだということを理解する必要がある。2016年に生まれた男の子が実際に何歳まで生きるかは、今後の死亡率が低くなることが予想されることから、2016年の平均寿命である80歳より当然長くなることが見込まれる。

また、例えば、65歳の男どうしが、今後何年生きるかを話し合っているとき、平均寿命が80歳だから、あと15年と考えるのは、もう一つの意味でも間違っている。というのは、65歳の平均余命は男の場合は19.55年であり、そういう意味からは、

65歳の男の平均寿命はいわば84歳だからである。

そこで、ここでは、加工指標である「平均寿命」ではなく、生データである「死亡年齢」から、ヒトは何歳ぐらいで死ぬのかを考えてみよう。

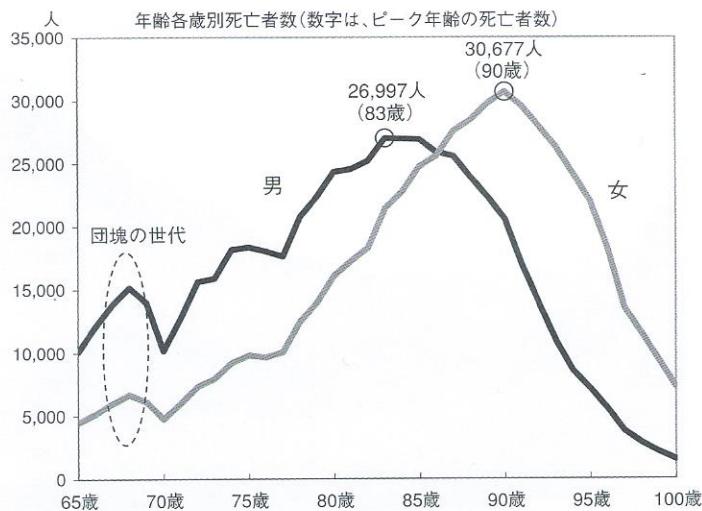
死亡年齢のピークは男83歳、女90歳

図1は、死亡届を集計した人口動態統計（厚生労働省）から、各歳別の死者数のデータをグラフにしたものである。

2016年の死亡ピーク年齢は、男が83歳、女が90歳となっており、いずれも平均寿命より長くなっている。新年の賀詞を遠慮することを伝える喪中はがきに記載された「享年」からもこのピーク年齢は実感されよう。

ちなみに、男女ともに68歳にもう一つのピークがあるのは、この年齢が団塊の世代のピークに当たっており、母数が多いので死亡数も多いからである。なお、女の場合は、この年齢では死亡率が男に比べまだ高くなないので、ピークはあまり目立っていない。

図1 何歳で死ぬ人が最も多いか（2016年）



注) 男女計では 87 歳が死亡者数 53,113 人と最多。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

戦後しばらくは 80 歳まで生きる人が非常に少なかった

図2には、年齢層別の死亡数の推移を示した。グラフは、死亡総数に占める全体的な構成を示す積み上げ棒グラフと、それぞれの年齢層のうち、いずれの死亡数が多くなり、またいずれの死亡数が少なくなったかの推移を示す折れ線グラフの両方を掲げた。

死亡総数は、1960年代から増え続け、2003年には100万人を超えた。最新の2016年には130万人、図にはないが最近発表された2017年の概数では134万人と、毎年、戦後最多を更新している。最近では、時代の特徴をあらわす用語として「多死社会」という言葉も登場している（ちなみに世界的に流行したインフルエンザ「スペインかぜ」が猛威を振るった1918年の149万人が戦前の最多記録であり、今でも、これを上回るには至っていない）。

ここでは、年齢層別の死亡数に着目しよう。

戦後すぐは、まだ、0歳（乳児）あるいは1～59歳の死亡が非常に多かった。

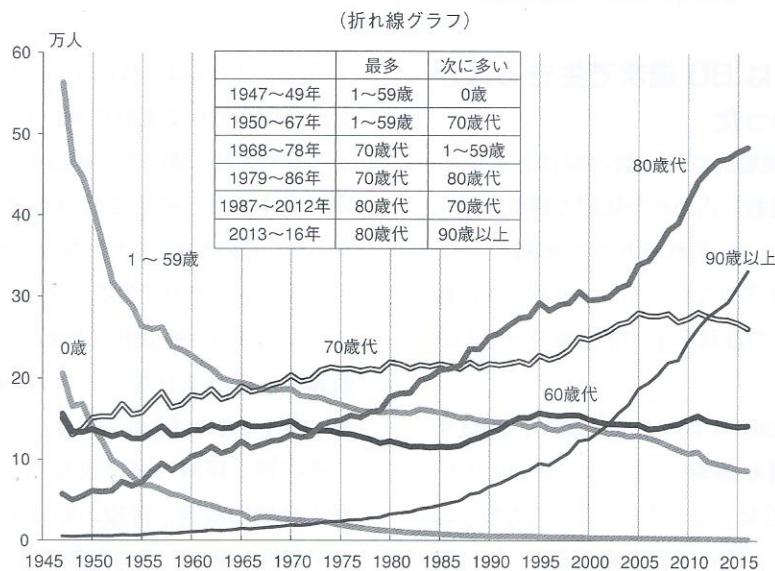
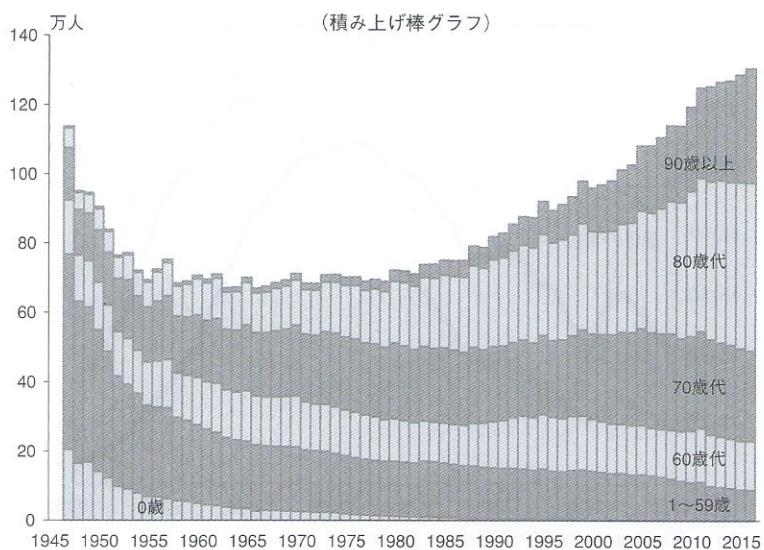
戦後しばらくは、戦前からの状況のまま、劣悪な出産環境の中で乳児の死亡が非常に多く、また子どもや青壮年期にも、事故や犯罪のほか、伝染病や食中毒など感染症で死亡する者が非常に多かった。このため、老人になって死ぬ人は、むしろ、多くはなかったのである。図から読み取れるように、この時期、80歳代で死ねる人はむしろごく少数派であり、「大往生」という言葉がこうした人たちに向けてささげられていた。

その後、経済の高度成長の中で、栄養状態と衛生状態の改善、医療の制度的・技術的進歩などが劇的に進み、平均寿命の延びとともに、若い時期に死ぬ者は激減した。

しかし、70歳代の死亡が最も多くなったのは、やっと高度成長期も後半の1968年になってからであり、現在のように80歳代の死亡が最多となったのは、バブル期の1987年からであるにすぎない。現在のように、高齢死亡が当然のようになったのは、実は、それほど前からのことではないのである。

高齢死亡の年代別の推移を見ると、70歳代の死亡数は、むしろこの十年間で減少傾向に転じ、

図2 年齢別死者数の推移



注) 1947年~72年は沖縄県を含まない。1948~84年の5の倍数以外は80歳以上の区切りのデータが得られなかったので80歳代と90歳以上を割合の補間推計により分割。2004年以前は総務省統計局「日本の長期統計系列」掲載データを使用。

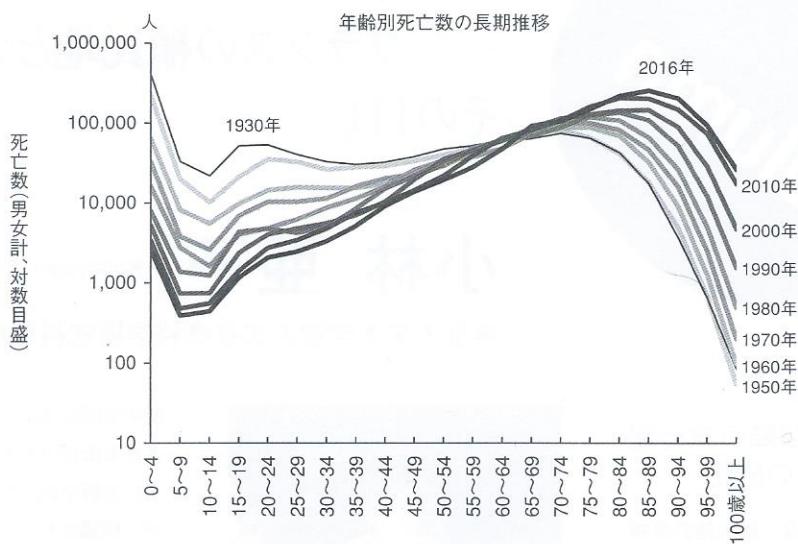
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

以前から右上がりの傾きの大きかった80歳代の伸びが続き、さらに、最近では90歳以上の伸びが80歳代を上回る勢いにある。いずれ、90歳以上の死亡が当たり前とされる日が来るに違いない(すでに女については幾分そくなっている)。

高齢死社会の到来

図3には、以上と基本的に同じデータであるが、戦前を含めほぼ10年おきの年齢5歳階級別死亡数を対数グラフで表現した。65歳未満では若い世代ほど死亡数が減り、65歳以上では高齢層ほど死亡数が増えていく傾向とともに、より高齢と

図3 高齢死時代の到来



注) 人口動態統計による。年次は1930年、1950年～2010年の10年おき、そして2016年であり、若年層では上から、高年層では下から並んでいる（ただし100歳以上の1930年と50年が上下逆など順逆の例外はある）。

資料) 国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2018」

なるピーク年齢前後にますます死亡が集中しているという傾向が明らかである。「高齢死」と「高齢死への集中」の時代が訪れているのである。「多死社会」というより「高齢死社会」が新時代の特徴として浮かび上がっているといえよう。

かつては、赤ん坊の時から何回も訪れる人生の危機を、その度、乗り越えることができた者、そしてどんどん少數になる者だけが老人となった。今では、ほとんど誰でもが老人になり、しかも、だいたい予測される年齢に死ぬ者が大半となる状況となった。

飢えて死んだり、戦争で死んだり、他人に殺されたり、呑みすぎや伝染病、食中毒で死んだり、労災で死んだり、病気が治らずに死んだりすることが少なくなり、また、生活環境の管理がすみずみまでいきわたり、遊泳中におぼれたりなど偶発的な事故で死ぬことも非常に少なくなった。このため、死に対する人々の印象も大きく変化している。

例えば、それが普通だと想定される死亡年齢以外の死が「異常な死」として認識され、「非業の死」として嘆かれる程度が従来とは比較にならないほど大きくなっている。死亡を伴うためマスコミが大きく取り上げる悲惨な事故や事件の多くは、以前なら、あまりに多すぎて国民には知らされずに終わったものなのである。殺人事件の犠牲者が10数年で半減しているのに国民にその実感がない点については、本連載の2013年12月号「犯罪減少という先進国的一般傾向」でふれた。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という言葉で有名な鴨長明の方丈記に記された無常觀など、哲学や文芸を通じて先哲が築いてきた死に対する人間の考えは現代の我々でも参考になることが多い。しかし、死のパターンがまるで違ってきている現代には、かつてとはまるで異なった死生觀が必要になってきているともいえるのではなかろうか。